「こども食堂」の取り組み広がる

企画特集

教会活動の伝統受け継ぎ 地域の親子に寄り添って

地域の子供たちに無料や低額で食事を提供する「こども食堂」が全国各地に2千286カ所あることが4月、民間団体の調査で分かった（コラム参照）。こうしたなか、〝現代の難渋〟を抱える人たちに、たすけの手を差し伸べてきた各地の教会でも「こども食堂」の取り組みが広がっている。布教部社会福祉課では、現在「こども食堂」を実施している教会の把握に努めており、その数は30カ所を超えると推測している。この企画特集では、「こども食堂」を開設し、地域の親子に寄り添う各地の教会の取り組みを紹介するとともに、板倉知幸・社会福祉課長の談話を掲載する。

地域住民と教友の協力得て

和歌山・紀ノ川分

和歌山市の紀ノ川分教会で4月22日、「おのみなとこども食堂」がオープンした。参拝場には、ハヤシライスやサラダなどを美味しそうに頬張る、子供たちの笑顔があふれている。

その様子を見守る岡定紀会長（44歳）は「なんとかこの日を迎えることができた」と目を細める。

4年前、教会長に就任して以来、地域住民が教会に寄り集えるような活動を模索してきた。そんななか、昨春、児童福祉に携わる三谷ふみ子・紀ノ海分教会長（67歳）から「こども食堂」の提案を受けた。

これを機に、各地の「こども食堂」を見学し、関連本を参考にしながら試験的に実施したものの、軌道には乗らなかった。

紀ノ川分教会で開かれた「おのみなとこども食堂」には、約160人の子供や親子が集まった　（4月22日）

そんななか、ある見学先の主催者から「近所の子供たちに料理を提供していたら、数人の地域住民から、私が天理教信者だからやっているのでは、と尋ねられたことがある」と聞いた。

岡会長は「昔からお道の教会では、身寄りのない人を預かったり、食べる物がない人に食事を提供したりしてきた。そうした教会活動の歩みがあるからこそ、その地域の住民が勘違いされたのだろう。先輩方が築き上げてきた〝おたすけの伝統〟に立ち、この『こども食堂』を必ず成功させようと、あらためて勇み立った」と話す。

その後、教区管内で初めて「こども食堂」を開いた「きうちこども食堂」（代表＝吉田幸恵・紀内分教会長後継者夫人）を見学した岡会長は、この例を参考に、地域住民の有志と共に「おのみなとこども食堂の会」を結成。さらに、全国団体「こども食堂安心・安全向上委員会」の支援プロジェクトの対象団体に選ばれたことで、保険や食品衛生管理者の配置など安全面での態勢も整った。

正式オープンに向け、小中学校や地域住民の理解を得て、校区にチラシ1千400枚を配布したところ、地域の大学生からボランティアとして協力の申し出があったほか、住民から食材の提供を受けた。

また、部内教会はもとより、支部の教友たちもスタッフとして協力してくれることになった。

迎えた当日。午前11時のオープン後、約160人の子供や親子が訪れた。受付を済ませた参加者に、スタッフが「おなかいっぱい食べてね」と声をかけながら食事を提供していく。

未信仰の友人と共にスタッフを務めた田島ムツ子さん（70歳・陽晃分教会ようぼく）は、同教会を拠点に『天理時報』の手配りに勤しむひのきしん者の一人。

「教会で『こども食堂』が行われることで、地域に根差したおたすけ活動が今後活発になるはず」と期待を寄せる。

食事後、子供たちは教会前に設置された手作りの輪投げや射的などのゲームコーナーを楽しんだ。

視察に訪れた南方健宏・県子ども未来課副主査（37歳）は「開放的な雰囲気の中で宗教色を感じさせず、子供だけでなく、家族連れや高齢者の姿も目立った。孤食対策や地域交流の場として会場を提供してくださり、大変ありがたい」と話した。

岡会長は「地域住民や教友の協力を得て、第一歩を踏み出すことができた。先輩方の長年の伏せ込みのおかげで、いま私たちがこうして活動できることへの感謝を胸に、今後も『こども食堂』を地道に続けていきたい」と語った。

コミュニティー再生も視野に

愛知・本愛大

本愛大教会（安藤正治会長・名古屋市）では4月27日、大教会の食堂を会場に初めて開いた。

同大教会では先ごろ、青年会本愛分会が中心となって、婦人会や少年会、学生担当委員会などと連携し、「こども食堂運営委員会」を設置した。

名古屋市内には昨年10月現在で31カ所の「こども食堂」があり、そのうち北、熱田、港の3区では、お道の教会が「こども食堂」を運営している。同運営委員会では、「こども食堂」を現代における新たなおたすけの一つと位置づけ、すでに「こども食堂」を開いている市内の教会や社会福祉協議会（＝社協）の助言を受けながら準備を進めてきた。

本愛大教会では、各会が連携して準備を進め、学区初の「こども食堂」を開いた　（4月27日）

実施に当たっては、大教会周辺の「日吉学区」に対し、「宗教活動を伴わない地域貢献活動」であることを求め、同学区内の全戸に回覧板を通じて参加を呼びかけた。

当日は、午後5時スタート。近隣に住む子供ら約30人が集まるなか、幼児から中学3年生までを対象に、カレーライスとサラダを振る舞った。

現場を視察した中村区社協の田中和快主事（39歳）は『こども食堂』が広がる背景として、貧困や孤食がよく取り上げられるが、子供たちと共に食事をするという、地域コミュニティー再生の手だてにもなる。地域住民が集い、会話を交わしながら食事をするという、ひと昔前ならどこでも見られた風景を取り戻すきっかけになれば」と話した。

後藤弘康・名古屋市区政協力委員協議会副議長（76歳）は『こども食堂』は、以前から学区念願の事業だった。会場が教会ということで敬遠する方もいるかもしれないが、地域の福祉活動として私たちもサポートすることになった。地域に根づく活動になるよう、今後も息長く続けてもらいたい」とコメントした。

〝見えない難渋〟に手を差し伸べ

鳥取・米城分

鳥取県米子市の米城分教会は今月、「こども食堂『ネバーランド』」をオープンして1周年を迎えた。

代表の辻聡会長（57歳）は、少年会活動に力を入れる一方で、市ボランティア協議会会長を務めるなど、地域の役職も長年担ってきた。

こうしたなか昨年2月、県が「こども食堂」の広がりを目的に開いた講演会に妻の洋江さん（58歳）と共に出席。「これも私たちにできる〝おたすけ〟」と直感し、県の担当者からアドバイスを受けながら準備を進めた。

「教会には大人数を受け入れる場所や食器、調理経験などの素地があって取り組みやすい」と洋江さん。

辻会長は「長年、地域の活動に携わっていたことから、社協や学校が活動を理解してくれ、快く広報してくれた」と振り返る。

開催日は毎月18日。毎回30人前後の子供や親が訪れている。

午後5時に集まった子供たちは、学校の宿題を済ませた後、6時に全員で合掌して「いただきます！」。食器は各自で片づけさせ、食後は子供や住民による紙芝居や落語など、さまざまなイベントを催している。

「自主性を重んじた雰囲気の中で、子供の成長が見られるのも楽しみの一つ」と洋江さんは話す。

また、「こども食堂」の取り組みをSNSに投稿したところ、野菜を寄付する支援者や、ボランティアを志願する地域住民が現れてきたという。なかには、米国ワシントン在住の日本人女性がSNSを通じて活動を知り、里帰りした際にボランティアとして駆けつけたケースもあった。

3回目の食堂を開いた際には、ある参加者から「近所に、夜10時まで親の帰りを待ちながら公園で遊ぶ二人の兄弟がいる。料金は私が払うので、その子たちに食事を提供してもらえませんか？」と依頼されたことも。辻会長夫妻は、公園で親の帰りを待っていた兄弟を教会に招き入れ、温かい食事を振る舞った。

辻会長は「開設して間もないが、普段は目が届かないところで苦しむ人たちがいることに気づくことができた。今後も定期的に『こども食堂』を開き、〝見えない難渋〟に手を差し伸べていきたい」と話した。

時代に即した教会活動の一つ

板倉知幸・社会福祉課長（談話）

2年ほど前から「こども食堂」に取り組む教会が増えている。これは、各地の教会が子供の貧困や孤食、子育て支援など、さまざまな問題に取り組む中で出てきた、時代に即した教会活動の一つだと思う。

近代の日本では社会福祉が発展し、本教としてもさまざまな福祉活動に取り組んでいる。しかし、現在のような社会福祉制度が整う以前から、各地の教会では、その時代の難渋を抱える人々に手を差し伸べ、おたすけに努めてきた。お道の精神でおたすけに励む中で、副次的に福祉活動に寄与することとなり、社会貢献にもつながっている。

社会福祉課では、教友のおたすけの後押しとなるよう、要望に応じてネットワークや情報交換の場を提供していきたいと考えている。「こども食堂」を含め、今後も各教会で地域の課題に積極的に取り組んでもらい、おたすけの輪を広げていただきたい。

コラム　「こども食堂」

貧困家庭や孤食状態にある子供に食事を提供する場として、2012年ごろから注目されるようになった。現在、地域の大人や高齢者、家族連れも受け入れる「こども食堂」が増えており、地域交流や子供たちを見守る場としての役割が強まっている。全国の民間団体「こども食堂安心・安全向上委員会」の調査によって、全国に2286カ所あることが分かった。その多くをＮＰＯ法人やボランティア、宗教団体などが運営しているという。